

「教育県大分」創造に向けた地域別意見交換会 in 宇佐 開催概要

〔開催日：令和8年7月14日(火)〕

【学校訪問】宇佐市立安心院小学校

〔訪問者〕大分県教育委員会（山田教育長、教育委員、教育次長 他）

宇佐市教育委員会（射場教育長、教育委員、課長 他）

【宇佐市立安心院小学校の概要】

西日本有数のぶどう産地の安心院盆地にある安心院小学校は、児童数71名（全8学級）、教職員数19名。令和8年度中に安心院中学校区の4小学校が統合する予定である。学校教育目標に「ふるさとを愛し、自ら学びを究め、高め合い、新たな価値を共創する子の育成」、学校経営の合言葉に「全力前新」を掲げている。

地理的には、僅か500mの直線道路沿いにこども園、小中高校が隣接する好立地にあり、日常的な小中高一貫教育を推進している。

以下の教育活動を中心に「自己調整力」と「協働的思考力」の2つの力を重点的に育成している。

- ①「授業の始まりと終わり」を大切にした学びの循環
- ②指導者の「課題の徹底精選」と「徹底して待ちぬく姿勢」
- ③小中高12年間を通して力を育む探究学習「地球未来科」
- ④子ども・教職員をつなぐ「4校交流事業」



別々の学校から集まっている授業とは思えない落ち着きが感じられた。
（山田 県教育長）

【安心院小学校の特色ある取組】

（1）「4校交流事業」の取組

令和9年度の4小学校統合を見据えた過渡期にあり、集団拡大による児童の不安解消に止まらず「強固な学習集団の土台作り」に取り組む。体育・音楽・外国語・道徳・地球未来科等の合同授業により、個の自立を図る「自己調整力」と、多様性を活かす「協働的思考力」を育成している。また教職員も引継ぎや授業準備を4校合同で行うことで多面的・多角的な児童理解や授業構想が進んでいる。

（2）「地球未来科」の取組

小中高12年間で4つの学びのステージに分けた「キーステージ制」を土台とし、安心院高校の生徒が小学生を指導するST（スチューデントティーチャー）活動、安心院中学校の生徒が音楽等を指導するML（ミドルリーダー）活動を通して自ら未来を創る力を養っている。更に「探究のスパイラル」を充実させることにより、関わる力、工夫する力、コミュニケーション能力を育成している。



本物の教育を創り出す覚悟で「全力前新」を合言葉に学校経営をしている。
（安心院小 正尾校長）

【学校訪問での意見交換内容】

- ・授業と学習環境について：児童が落ち着いて授業に取り組む姿勢や教職員の丁寧な言葉遣い、整理整頓された棚、靴箱など、学習環境が素晴らしかった。また、高校生が考えるヒントを与えながら優しく小学生に教える姿や、児童の姿勢等を指導する姿に、小中高一貫教育の成果が感じられた。
- ・統合へのプロセスと課題：来年度の4校統合を控え、児童間の交流は月2回の合同授業などを通じて順調に進んでいる。一方で、校区拡大に伴う児童の移動手段の確保が、体験活動などの充実における今後の課題として挙げられた。
- ・地域や幼小中高の連携：地域活動の統合については、学校と地域が連携して「街づくり協議会」等で分担を整理し、活動の継承を図っている。さらに、保育園との交流や架け橋プログラムの活用も進んでおり、保幼小中高の一貫した長期的な育成体制への期待が示された。



「ドローンプログラミング」を小学生に指導する高校生（スチューデントティーチャー）

**【意見交換会テーマ】「芯の通った学校組織」を基盤とした教育水準の向上
～One Team 学力向上に向けた組織的な取組について～**

【出席者】市関係者(18名)、県関係者(32名)、計(50名)

【つながる学びで未来をひらく「OneTeam」で行う教育改革について】

若手教員の急増や学力低下といった教育現場の喫緊の課題に対し、教員個人の力量だけに頼るのではなく、学校全体、市全体が「One Team」となって組織的に授業改善と組織改革を推進している。「つながる学びで未来をひらく」をスローガンに掲げ、児童生徒の学力向上と教員の働き方改革の双方を見据えた先駆的な取り組みを以下の3つの柱で展開している。



「ふるさと宇佐を愛し、未来に希望と夢を抱き、自己実現できる子ども」を育成していきたい (射場 宇佐市教育長)

(1) 専門チーム体制の組織化

学力向上や英語教育、ICT活用などを専門的に支援するチームやアドバイザーを組織。市全体で目指すべき授業改善のグランドデザインや若手教員育成の方向性を明確にし、組織的・計画的なサポート体制を構築した。

(2) 提言の具現化（見合う・高め合う場づくり）

小中学校の連携や、小規模校同士をオンライン等で繋ぐ合同教科部会を定期的開催。積極的な研究授業や相互の授業公開を重ねることで、効果的な指導法や成功事例をスピーディに共有・検証できる環境を整えている。

(3) 学校リデザイン（組織と生活時程の再構築）

従来の常識にとらわれない以下の構造改革を実行している。

- ・チーム担任制（小学校）：1人の担任が学級経営を抱え込む形から、学年主任を含めた複数の教員が協働して児童を見守り指導する体制へ移行。
- ・午前5時間制（中学校）：授業を午前に5時間実施する新しい生活時程（時間割）を導入。放課後にゆとりを生み出すことで、生徒が個別に復習や相談を行える「学力向上タイム」を確保し、教員の教材研究時間の創出にもつなげている。



子ども教職員も「OneTeam」になる取組を行っている (宇佐市教育委員会 瀬々課長)

【意見交換の内容】

教員不足の現状や若手教員の増加に伴う学校現場の課題、それらに対応するための組織的な育成・サポート体制、人材確保のあり方、校種間連携が意見交換の中心となった。

(1) チーム担任制の成果について

これまで「自分のクラスの子」と抱え込みがちだった児童の課題や変化を、日常的に共有する姿が見られる。多角的な視点での子ども理解が進み、気になる行動やトラブルにもチームで先手を打って対応できるようになってきている。

(2) 現場の課題と若手の育成について

若手教員が急増する一方、ミドルリーダーの不足や、多忙化による管理職・ベテランのサポート不足が課題。子どもや保護者への対応が高度化する中、初任者が一人で担任を抱え込むシステムは限界を迎えており、複数人で対応する「チーム担任制」などの組織的なアプローチが不可欠である。また、指導力に悩む若手に対して、管理職や先輩が「原点」に立ち返らせつつ、その良さを辛抱強く褒めて育てる姿勢が求められる。

(3) 教職の魅力発信と大学との連携

大学では教員志望率自体は向上しているものの、期待された優秀な若手が早期離職してしまう現実もある。精神論ではなく具体的な「働きやすさ」や「仕事の魅力」を発信すること、そして大学と現場が実態を共有し、採用後のギャップを埋めることが重要。

(4) ベテランと若手の協働

教員が生徒と深く向き合い関係を築くことで、生活態度や学力の向上につながる。保護者対応や不登校といった課題に対し、ベテランと若手が協働して対応できる体制づくりが、教員自身の成長と持続可能な学校運営を支えるためにも大切である。

(5) 校種間連携

安心院高等学校長より「17年間の小中高一貫した様々な取組、地球未来科を中心とした授業研究により、学びの一貫性や教職員の繋がりができていることは非常に大きい」と校種間連携の大切さが語られた。